

9・11 同時多発テロ以降のアルカーイダの動向

西野 正巳

9・11 同時多発テロ以降のアルカーイダの動向

西野正巳

<要 旨>

9・11 後、アルカーイダのヘッドクォーターはプロパガンダに最大の重点を置く。彼らはこれにより、新規メンバー獲得や勢力拡大を狙っている。一方、これに共鳴して新規メンバーになることを望む者達は、自らの活動地域に地域支部を新設し、ヘッドクォーターからは独立して個別のテロ活動に従事する。両者間には分業体制が成立している。

アルカーイダの弱体化に向けた処方箋としては、①イスラム原理主義に対する人々の関心を失わせる、②中東諸国の教育カリキュラムを変更して、イスラム原理主義を信奉する価値観を植えつけないようにする、などが考えられるが、現状では実現可能性に乏しい。

はじめに

9・11 同時多発テロを起こして世界に衝撃を与えたアルカーイダは、その後も活発な活動が続けている。本研究は、9・11 以降のアルカーイダの動向を分析し、その実像を明らかにする。その手順としては、まず、第1節で「アルカーイダの誕生から9・11までの過程」を、重要人物の半生を中心に辿る。次に、第2節において「アルカーイダのイデオロギー」が1990年代後半に確立するまでの、イスラム原理主義過激派のイデオロギーの展開を明らかにする。そして、第3節「9・11以降のアルカーイダ」では、ヘッドクォーターと地域支部の分業体制や、地域支部の新設・拡大、そしてヘッドクォーターのプロパガンダ活動などを詳細に説明する。最後に、第4節「おわりに」において、この問題に対処する上での有効な処方箋を探りたい。

1 アルカーイダの誕生から9・11まで――重要人物の半生を中心に

本節では、ウサーマ・ビン・ラーディン (Usamah ibn Ladin) (アルカーイダ最高指導者)、アイマン・ザワーヒリー (Ayman al-Rawhira) (アルカーイダ No.2)、アブドッラー・アッザーム (Abd Allah Azzam) (ビン・ラーディンの師匠)、ムハンマド・アター (Muhammad Atta) (9・11 でワールドトレードセンターに突入し自爆死したパイロット) ら重要人物の9・11までの足跡を中心に、アルカーイダの形成過程を辿る。

(1) ウサーマ・ビン・ラーディン

サウジアラビア人¹ウサーマ・ビン・ラーディン(1957年～)は1988年頃にアフガニスタンでアルカーイダ(al-Q $\ddot{a}$ idah)²を設立されたとされる³。1979年のソ連によるアフガニスタン侵攻を契機に、1980年代にはアラブ諸国から多数のイスラム原理主義者が義勇兵としてアフガニスタンやその隣国パキスタンに参集していた。そのため、1980年代の両国では、多国籍のイスラム原理主義者を大同団結させるネットワークのようなものが形成されつつあった⁴。アルカーイダは、こうした流れの中で設立された組織の一つである。

アルカーイダ設立の翌年である1989年、ソ連はアフガニスタンから撤退した。それに伴い、ビン・ラーディンも同年にサウジへ帰国し、実業家としての仕事を一時は再開した。しかし翌1990年8月、イラクが突如クウェートを占領し、さらにサウジを侵攻する構えを見せたことに對し、サウジは国土防衛のため米軍を駐留軍として招き入れた。そしてこのことが、ビン・ラーディンを激怒させた。ビン・ラーディンらサウジ人のイスラム原理主義者の理解では、アラビア半島には、イスラム教徒以外の者が居住することは許されない⁵。そのような場所に異教徒である米軍を駐留させたサウジ政府を、ビン・ラーディンは糾弾した。ビン・ラーディンが米国やサウジ政府を敵視するようになったのは、この出来事に端を発する。

結局、政権と対立したビン・ラーディンはサウジに住み続けることが困難な状態に陥り、ウマル・バシール(TM Umar al-Bash $\ddot{o}$ r)政権下のスーダンに移った。そして1996年、バシール政権との関係も悪化したため、ビン・ラーディンは仲間を引き連れアフガニスタンに再

¹ ビン・ラーディンは1994年にサウジアラビア国籍を剥奪されており、その後は事実上無国籍である。保坂修司『正体——オサマ・ビンラディンの半生と聖戦』(朝日選書、2001年)116ページ。

² 語義的には原則、土台、拠点、基地などを意味する。

³ 石野肇『ウサーマ・ビン・ラーディン——その思想と半生』(成甲書房、2001年)28ページ。

⁴ この時期にアラブ諸国のイスラム原理主義者多数がアフガニスタンにきた理由の一つは、彼らを厄介払いしたいと思っていたアラブ諸国政府が、彼らのアフガニスタン行きを助長したことにある。石野『ウサーマ・ビン・ラーディン』31ページ。

⁵ イスラム教の教義では、地球上のアラビア半島を除く場所においては、イスラム教徒以外の異教徒も居住していて構わないが、アラビア半島に限っては、異教徒は一時居留者や旅人として滞在することのみが認められ、恒久的な居住者として住むことは理論上認められない。この教義は、預言者ムハンマド(Muhammad ibn TM Abd All $\ddot{a}$ h ibn TM Abd al-Mu $\ddot{a}$ lib)がその晩年、当時アラビア半島内に居住していたユダヤ教徒の諸部族を追放、肅清した先例に基づくことされる。なお、この教義については、サウジなどアラビア半島に居住するイスラム教徒は強く意識しているが、それ以外の地域に居住するイスラム教徒は(イスラム原理主義者を含め)、自分たちに直接関与しない問題であるため、概して関心が低い。これについては、菊地達也、西野正巳「2004年10月ビン・ラーディン声明とその意義——翻訳と解題」『神田外語大学紀要』第18号(2006年)449～461ページを参照。またユダヤ教徒の追放、肅清については、例えば、大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』(岩波書店、2002年)334ページの項目「クライザ族」を参照。

び渡った。この時期、アフガニスタンではターリバーン（≡ $\pm lib \pm n$ ）⁶が支配領域を拡大させつつあり、ビン・ラーディンの滞在していた場所もターリバーンの支配下に入った。ターリバーンは、自分たちと同じイスラム原理主義者であるビン・ラーディンらアルカーイダを歓迎し、彼らはそのままターリバーンの庇護下に入った。

その後、1998年8月、ケニアとタンザニアの米国大使館を狙った連続爆発事件が起きた。この事件にはビン・ラーディンが関与していたと見られており、米国は11月にビン・ラーディンを起訴した⁷。なお1998年年末までは、ビン・ラーディンはニューズウィーク誌などのインタビューに応じる、まだ所在が分かる接触可能な人物だった⁸。しかし1999年頃に彼は人前から姿を消し、それ以降今日まで接触が不可能な状態にある。

(2) アブドッラー・アッザーム⁹

パレスチナ人アブドッラー・アッザーム（1941～89年）は、ビン・ラーディンの師匠とされる人物である¹⁰。アッザームは1970～73年にエジプトへ留学した際、サイイド・クトゥブ（Sayyid Quṭb）の遺族と交流し、そこでクトゥブの思想に強く影響を受けた¹¹。その後、サウジで大学教員をしていた1981年に、彼はパキスタンへ派遣された。以降、彼はアフガニスタンへ向かうアラブ人義勇兵への支援活動に従事するようになった。そして1984年、アフガニスタンかパキスタンで彼はビン・ラーディンと初めて会い、ビン・ラーディンは16歳年長のアッザームに弟子入りしたとみられる。同年、アッザームが義勇兵支援のた

⁶ 語義的には、「学生たち」を意味する。ターリバーンは、イスラム教スンニ派の一派であるデーオバンド派の宗教学校で学んだ学生たちが発足させたものとされており、そのため、このような名称が付いた。

⁷ 石野『ウサーマ・ビン・ラーディン』60ページ。

⁸ 例えば1998年12月、ビン・ラーディンはカタールのアラビア語ニュースチャンネルであるアルジャジーラ（al-Jazeera）のインタビューに応じた。このインタビューについては、ブルース・ローレンス編『オサマ・ビン・ラーディン発言』（河出書房新社、2006年）110～147ページを参照。一方、アルジャジーラは2001年の9・11以降、ビン・ラーディンのビデオメッセージを多数放映したが、これらは一方的に送りつけられたもの、あるいはウェブサイト上で公開されたものであり、直接会ってのインタビューではない。

⁹ この項目の内容は基本的に、2008年10月18日に京都大学で開催されたワークショップ「アフガニスタンは今どうなっているのか」にて配布されたペーパー、樋口征治「アブドッラー・アッザームとアラブ・ムジャハーディーン」と、<<http://bait-al-maqdis.ahlamontada.com/montada-f20/topic-t2335.htm>>（2009年3月19日アクセス）に依拠した。

¹⁰ ビン・ラーディンがアッザームを尊敬していることは、例えば、アルカーイダが2006年に公開した9・11事件5周年記念映画「マンハッタン攻撃——知識は行動のためにある」（Ghazwah Minhṭin al- $\mathcal{I}$ lm li-l- $\mathcal{I}$ Amal）内にアッザームの演説が収録されていることから推察できる。同映画については後述。同映画の映像ファイルは、西野が所持。

¹¹ サイイド・クトゥブは、イスラム原理主義過激派のイデオロギーを作り上げた人物。アルカーイダも、思想的にはクトゥブの弟子筋にあたる。クトゥブについては後述するが、拙稿「サイイド・クトゥブの社会論」『日本中東学会年報』第17-1号（2002年）97～122ページを参照。

めの組織を設立すると、ビン・ラーディンもこの組織の一員として活動した。しかし、戦闘よりも後方支援を重視し、また、アフガニスタンではよそ者であるアラブ人の単独軍事行動には否定的なアッザームと、戦闘を重視し、アラブ人の単独軍事行動を辞さないビン・ラーディンの間で徐々に見解の相違が顕在化し、1986年頃から、ビン・ラーディンはアッザームと離れて独自の行動を取るようになった。しかしビン・ラーディンはアッザームと喧嘩別れしたのではなく、それ以降もアッザームを師として尊敬していたとみられる。なおアッザームは1989年に、パキスタンのペシャールで爆発物によって暗殺された。

アッザームの最も有名な著作は『イスラム教徒の土地の防衛は最も重要な個人義務である』（*al-Difʿ al-ʿan Arḍ al-Muslimah al-ahamm Furḍ al-ʿAlayh*）である。同書は、アフガニスタンやパレスチナのような、本来イスラム教徒の土地であるにもかかわらず、異教徒の侵略を受けている国においては、侵略者に対する防衛ジハードを行うことが、イスラム教徒全員の義務であると説いている。アッザームは思想家としては、サイイド・クトゥブのイスラム原理主義過激派思想をビン・ラーディンに継承させる結節点の役割を果たしたとされる。

(3) アイマン・ザワーヒリー¹²

エジプト人アイマン・ザワーヒリー（1951年～）は上流階級の家生まれ、1974年にカイロ大学医学部を卒業した。10代の頃には独自のイスラム原理主義組織を秘密裏に設立していたとされる。ザワーヒリーの思想はサイイド・クトゥブの思想から強く影響を受けたが、その一因としては、1966年のクトゥブの処刑にザワーヒリーが衝撃を受けたことが挙げられる。1981年にムハンマド・アンワル・サーダート（Muḥammad Anwar al-Sādāt）・エジプト大統領暗殺事件が起きた際、同事件を実行した「ジハード団」（Tanẓīm al-Jihād）のメンバーだったザワーヒリーは逮捕・投獄された。暗殺事件の裁判が公開で行われた際、彼は西側メディアに向けて英語で演説を行い、注目を集めた¹³。獄中では激しい拷問を受け、そのことは、彼のエジプト政府に対する反感を強めたとされる。彼は1984年に釈放され、1985年にサウジへ出国した。そして1986年にアフガニスタンへ渡った。彼はソ連の侵攻後間もない1980年と1981年にも同国を訪問しており、アフガニスタンを訪れるのはこの時が少なくとも3回目だった。1986年のアフガニスタン再訪時に、おそらくザワーヒ

¹² この項目の内容は、ザワーヒリーの友人であるエジプト人イスラム原理主義者ムンタシル・ザイヤート（Muntaḥir al-Zayyat）が書いたザワーヒリーの伝記的著作 Montasser al-Zayyat, *The Road to al-Qaeda: The Story of Bin Laden's Right-Hand Man* (London: Pluto Press, 2004) に主に依拠。

¹³ この場面の映像は、例えば英 BBC が 2004 年に放映したドキュメンタリー番組“The Power of Nightmares”においても放映された。

リーとビン・ラーディンの交流は始まった。その後、ソ連の撤退と内戦の激化に伴い、アフガニスタンに住み続けることが困難となったため、ザワーヒリーはスーダンに移った。そしてターリバーンがアフガニスタンのほぼ全土を実効支配するようになった後、遅くとも1996年までに、ザワーヒリーはアフガニスタンに戻ったとされる。

なおザワーヒリーは一般的にアルカーイダ No.2 と呼ばれている¹⁴が、「組織運営上はビン・ラーディンが No.1、ザワーヒリーが No.2 かもしれないが、イスラム原理主義のイデオロギーについては、ザワーヒリーの方が遥かに博学なので、ザワーヒリーが師匠、ビン・ラーディンが弟子である」との見方もある¹⁵。アルカーイダは 9・11 以降、ビン・ラーディンやザワーヒリーら幹部の音声及びビデオメッセージを発表し続けているが、分量的にはビン・ラーディンのものよりもザワーヒリーのものの方が圧倒的に多く、特に近年はその傾向が強い。そのため現在は、アルカーイダのイデオロギー ザワーヒリーのイデオロギーと言っても過言ではない。

(4) ムハンマド・アター¹⁶

エジプト人ムハンマド・アター（1968～2001 年）は、9・11 の際にハイジャック機のパイロットとしてワールドトレードセンター（WTC）に突入して自爆死した人物であり、9・11 実行部隊の中心人物とされている。但し、彼は実行部隊の中心人物ではあるが、アルカーイダ（のヘッドクォーター）の中心人物ではないし、そもそも、アルカーイダのヘッドクォーターの一員でもない。例えば、彼とビン・ラーディンが互いに面識があったのかは長らく不明であった¹⁷。

アターはエジプトで育ち、カイロ大学工学部を卒業後、1992 年にドイツのハンブルク工科大学に留学した。彼は元々、イスラム原理主義への関心は薄かったが、留学後、急にイスラム原理主義への傾倒を強めたとされる¹⁸。ドイツ留学中、彼はアフガニスタンやサウ

¹⁴ 例えばアルジャジーラもこの表現を日常的に用いる。

¹⁵ 先述の英 BBC ドキュメンタリー“ The Power of Nightmares”もこの見解を採る。また BBC のウェブサイトには、「1990 年代後半にザワーヒリー率いるジハード団とビン・ラーディン率いるアルカーイダが合併した際、ザワーヒリーのジハード団が事実上アルカーイダを乗っ取った」との専門家の見解が掲載されている。<http://news.bbc.co.uk/2/hi/middle_east/1560834.stm> 2009 年 3 月 20 日アクセス。

¹⁶ この項目の内容は、2002 年 9 月にアルジャジーラが放映した 9・11 事件 1 周年記念番組“Sirr al-Gḥayb al-ʿarq il 9/11”と、朝日新聞アタ取材班『テロリストの軌跡』（草思社、2002 年）に依拠した。同番組のビデオは西野が所持。

¹⁷ 2004 年 10 月にビン・ラーディンはようやく、アターと面識があったことを明かした。2004 年 10 月 29 日にアルジャジーラが放映したビン・ラーディンのビデオメッセージを参照。同メッセージの映像は西野が所持。

¹⁸ 例えば、2005 年 7 月のロンドン連続爆破事件の実行犯がパキスタン系英国移民の子孫であること

ジアラビアなどを訪れており、アフガニスタンではアルカーイダとの接触などを、サウジアラビアではメッカ巡礼を行ったとみられる。1999年にハンブルク工科大学の修士号を取得後、2000年に米国に渡りパイロット養成学校で操縦技術を学び、そしてその翌年、9・11を決行した。

以上をまとめると、アッザームやザワーヒリーといったエジプトで学んだイスラム原理主義者が、ビン・ラーディンに思想的影響を与えた。それ故、ビン・ラーディンのイスラム原理主義思想はエジプト人サイイド・クトゥブに由来する“正統な”イスラム原理主義思想と言える。但しビン・ラーディンはサウジ人であり、そのため、「アラビア半島への外国人の居住」に過敏に反応するという、サウジ人に特有の排外主義思想も備えている。“正統な”イスラム原理主義と、サウジ的な排外主義を兼ね備えた人物がビン・ラーディンであり、その彼が、アフガニスタンにアラブ諸国からの義勇兵が集まる環境下で、設立したネットワーク型の組織がアルカーイダである。

一方、9・11実行部隊の中心人物であるムハンマド・アターとビン・ラーディンの関係は希薄である。但し、ヘッドクォーターであるビン・ラーディンらと、個別のテロを行う実行部隊のメンバーの関係が希薄なのは、9・11に限定されない。アルカーイダが実行したとされる他のテロにおいても、実行部隊とヘッドクォーターの関係は概して薄いとみられる。

2 アルカーイダのイデオロギー

アルカーイダのイデオロギーはサウジの排外主義を除けば、イスラム原理主義過激派の典型的な（＝“正統な”）イデオロギーであり、独自色はほとんどない。イスラム原理主義過激派のイデオロギーは、(1) 1960年代にその原型が構築され、(2) 70～80年代に理論的發展を遂げ、(3) 90年代後半頃に多少の転換を経験した。以下、この3段階に分けて、イスラム原理主義過激派のイデオロギーを提示する。この内の最終段階のもの、つまり(3)が、アルカーイダのイデオロギーである。

(1) 1960年代に構築された理論的土台

イスラム原理主義過激派のイデオロギーを構築した人物は、エジプト人思想家サイイド・クトゥブである。彼は1964年に『道標』（*Maṭṭih al-ṣarāq*）を著したが、その著作の

が示すように、(元々は原理主義者ではなかった)イスラム教徒が異文化圏に順応できず、結果、原理主義者となってテロを起こす事例は、しばしば見られる。同事件については<http://news.bbc.co.uk/2/hi/in_depth/uk/2005/london_explosions/default.stm>（2009年3月20日アクセス）を参照。

内容を危険視されたため、1966年に処刑された¹⁹。

『道標』にまとめられた彼の思想は、要約すると、以下の通りである²⁰。

地球上に存在する全ての社会²¹は、イスラム社会とジャーヒリーヤ²²社会に二分される。中間項は存在しない。イスラム社会とは、そこに居住する人々がイスラム教徒を名乗り、礼拝や断食などの宗教儀礼を順守し、かつイスラム法（sharāʿah）を実施する社会である。この社会では主権は神に属する。神定法²³が実施されており、全ての人間は、神が定めた法に服従する。そのため、「全ての人間は平等に神の法に従う」という意味で、人間間の平等が実現する。それ故、イスラム社会とは平等社会である²⁴。

一方ジャーヒリーヤ社会とは、イスラム社会以外の全ての社会である。ジャーヒリーヤ社会は、4つのパターンに類型化できる。第1のパターンは、共産主義社会である。共産主義社会は、神の存在を否定しており、また、人間と動物を同一視している。この社会は神の否定からも明確なように、イスラム社会の条件を欠く。第2のパターンは、日本、インドなどの偶像崇拜社会である。これらの社会は理念レベルでは神以外の存在を神格化する点²⁵、行為レベルでは人定法を実施する点で、イスラム社会の条件を欠く。第3のパターンは、ユダヤ教、キリスト教社会である。この社会は、理念レベルでは三位一体説の主張などにより多神崇拜の罪を犯している点、行為レベルでは人定法を実施する点で、イスラム社会の条件を欠く。第4のパターンは、「私達の住む社会はイスラム教徒の社会である」と自称する社会である。この社会は神以外の存在に主権と立法権を与え、そこから法を引き出す点でイスラム社会の条件を欠く。また、この社会の住人はイスラム教徒を自称していても、神以外の存在に主権や立法権を認めている限り、イスラム教徒ではない。

なお、現在、イスラム社会は地球上から消滅した。今存在する社会は全て、ジャ

¹⁹ サイイド・クトゥブの生涯については、拙稿「サイイド・クトゥブの生涯——転機の問題を巡って」『イスラム世界』第58号（2002年）19～39ページを参照。

²⁰ 以下については、Sayyid Qutb, *Maʿlim fī al-ʿSharʿ* (Cairo: Dār al-Shurʿ, 17th print, 1993)を参照。

²¹ 原語では mujtamaʿ (社会)。だが、サイイド・クトゥブは社会と国家を区別していないため、社会＝国家である。

²² ジャーヒリーヤ (jahiliyyah) とは、語義的には無知、無明を意味する。ジャーヒリーヤ社会を意識すれば、無知蒙昧がはびこる暗黒社会、となる。*The Oxford Encyclopedia of the Modern Islamic World* (Oxford: Oxford University Press, 1995), vol.2, pp.352-354.

²³ 文字通り、神が定める法。これの対極に位置するのが、人間が定める法、すなわち人定法 (qānūn waḥidī) である。

²⁴ つまりイスラム社会での平等とは、経済的な平等を意味しない。

²⁵ イスラム教は一神教であり、また、偶像崇拜を厳禁している。

ーヒーヤ社会に分類される。

サイイド・クトゥブは以上の4類型でジャーヒーリーヤ社会を分類した。彼の理論が衝撃的だったのは、第4のパターン、すなわち、自称イスラム社会なる概念を発案し、現実の国家や社会を断罪した点にある。それまで人々は、「イスラム教徒が暮している社会は、イスラム社会である」と素朴に考えていた。しかしクトゥブは、「仮に人々が礼拝などの宗教儀礼を実践していても、イスラム法が実施されていない限り、その社会はジャーヒーリーヤ社会に属する」と唱え、それにより、中東諸国の政権のイスラム性(正統性)を否定した。そしてこれによって、クトゥブは伝統的なイスラム政治思想では禁止されていた反乱を理論的に正当化した。伝統的なイスラム政治思想では、イスラム教徒である統治者に対する反乱は禁止されていた。反乱は無政府状態や無秩序を生み出すが、無政府状態や無秩序は強く忌避されるからである²⁶。クトゥブは自称イスラム社会や自称イスラム教徒なる概念を作り出すことを通じて、「これまで『イスラム教徒である統治者』とみなされていた者は、実はイスラム教徒ではない。それ故、その者に対する反乱は合法である」との理論を編み出した。これによって、イスラム原理主義者による自国内での反乱や反体制運動(=近い敵との戦い)は正当化されることになった。また、クトゥブはジャーヒーリーヤ社会の類型に共産主義社会やユダヤ教・キリスト教社会も含めていたため、イスラム原理主義者によるソ連や欧米との戦い(=遠い敵との戦い)も正当化された。つまりクトゥブは、イスラム原理主義者が自分たち以外の全ての者に対して戦いを挑むことを合法化したのである。そして彼の理論は、イスラム原理主義過激派の基本理論として今日まで継承されている。

クトゥブが1960年代にこの理論を唱えた際、特に重要性を持っていたのは、この4類型の内、第1のパターンと第4のパターンだったとみられる。彼が暮していた当時のエジプトは、社会主義路線を取るナセル(Jamāl 'Abd al-Nāṣir)政権下にあった。そのため、クトゥブは当時のエジプト社会を、「第1のパターンと第4のパターンが融合したジャーヒーリーヤ社会」とみなし、その打倒の正当性を訴えたとみられる²⁷。

(2) 1970～80年代の理論的發展²⁸

²⁶ 伝統的イスラム政治思想のこのような見解については、例えば、日本イスラム協会監修『新イスラム事典』(平凡社、2002年)119～120ページ、「イブン・ジャマール」の項目を参照。

²⁷ 以上の分析については、拙稿「サイイド・クトゥブの社会論」を参照。

²⁸ この項目については、Niṣṣan al-Ḥudūd al-Jihādī: Hal huwa al-Bad' al-Islāmī fī Miṣr (Cairo: Dār al-Qur'ān, 1988)所収のMuḥammad 'Abd al-Salām Faraj, *al-Farāḡ al-Ghāib* 及び、中田考「聖戦(ジハード)論再考」『オリエント』第35巻第1号(1992年)16～31ページに主に依拠した。

クトゥブの理論は1970～80年代に、エジプト人ムハンマド・アブドッサラーム・ファラグ (Muhammad Abd al-Salam Faraj) によってさらに発展した。ファラグは武装闘争の理論を構築し、所謂“革命のジハード論”を作り出した。

ファラグは、現在の中東諸国がイスラム国家ではないとの現状認識については、クトゥブと見解を共有する。ファラグによると、現在の中東諸国の状態は、イスラム教国に異教徒が攻め込んできた状態とほぼ同一である。そのため、必要とされるジハード²⁹は攻撃ジハードではなく防衛ジハードであり、それ故、ジハードは集団義務 (farḥ kiftiyah)³⁰ではなく、個人義務 (farḥ ṭmayn)³¹になる。また、理想的には中東諸国の政権も欧米など外国 (= 遠い敵) の政権も全て打倒されるべきであるが、中東諸国の政権 (= 近い敵) の打倒が優先される。なぜなら、欧米のキリスト教徒、ユダヤ教徒らは生まれながらの不信仰者 (kūfir) であり、イスラム教徒だったことはない。一方、中東諸国の政権を担う者たちは、イスラム教徒として生まれたにもかかわらず、その義務を怠り、背教者 (murtadd)³²に転落した。不信仰者との戦いと背教者との戦いでは、背教者との戦いが優先される。それ故、イスラム教徒は中東諸国の政権をまず打倒すべきとされる。

以上のように、ファラグは武装闘争の理論を構築した。彼は、遠い敵との戦いと近い敵との戦いでは、近い敵との戦いが優先される、と唱え、敵の優先順位を明確化した。彼の理論は、1981年に、自身が属するジハード団が1981年にサーダート・エジプト大統領を暗殺することで結実する。但し、ジハード団は大統領暗殺には成功したものの、政権掌握には失敗し、イスラム国家樹立計画は頓挫した³³。

(3) 1990年代後半頃における攻撃対象の転換——近い敵 (= 中東諸国の政権) から遠い敵 (= 欧米など中東域外) へ³⁴

1981年のサーダート暗殺事件は、「近い敵との戦いが優先される」との理論を忠実に実行した結果だった。一方、その少し前、1979年のソ連によるアフガニスタン侵攻を契機に、

²⁹ ジハード (jihād) は語義的には努力を意味するが、転じて聖戦の意味で用いられる。聖戦という意味でのジハードには大ジハードと小ジハードがあり、大ジハードは「自身の心の中にある煩惱との精神的戦い」、小ジハードは「異教徒との戦争」である (The Oxford Encyclopedia of the Modern Islamic World, vol.2, pp.369-373 を参照)。この項目でのジハードは、小ジハードを指す。

³⁰ イスラム教徒の集団の内、誰かが果たせばよい義務。全員が果たす必要はない。

³¹ イスラム教徒全員が果たすべき義務。例えば、一日5回の礼拝などもこの範疇に属する。

³² 背教者とは、イスラム教徒をやめた棄教者のこと。

³³ サーダート暗殺事件については、例えば Gilles Kepel, *Jihad: The Trail of Political Islam* (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 2002), pp.86-87. を参照。

³⁴ この項目については、2008年3月15日に東京大学文学部イスラム学研究室第3回同窓会記念講演会にて西野が行った発表「イスラム原理主義過激派の転換点——“近くの敵”から“遠くの敵”へ」に依拠。

アラブ人のイスラム原理主義者たちは義勇兵として、アフガニスタンでの対ソ連戦争に参加し始めた。そしてソ連は遠い敵の範疇に属する。こうして、理論より先にまず実践として、遠い敵との戦いが始まった。おそらく、イスラム原理主義者が現実に遠い敵と向かい合ったのは、この時が初めてだと思われる。アフガニスタンで遠い敵と戦うようになったことは、彼らが遠い敵との戦いの優先順位を理論面でも引き上げる契機になった可能性がある。

1989年にソ連がアフガニスタンから撤退すると、戦いはひとまず終結し、彼らは母国であるアラブ諸国に戻った。その後間もない1992年頃から、アラブ諸国の一つエジプトでは、イスラム原理主義組織「イスラム集団」(al-Jamā'at al-Islāmiyyah)が外国人観光客を襲撃する事件が多発するようになった。これは、近い敵(＝中東諸国の政権)内部での遠い敵(＝欧米など中東域外)との戦い、と呼ばれるべき現象である。また1993年には、同じくイスラム集団が米国ニューヨークでWTCを爆破する大規模テロを実施した。これは、遠い敵との戦いそのものである。1990年代のこれらのテロには多くの場合、アフガニスタンの対ソ連戦争で軍事訓練を積んだ“アフガン帰り”のイスラム原理主義者が関与していたと指摘されている³⁵。こうして、実践面においては、近い敵との戦いよりもむしろ、遠い敵との戦いが顕在化していった。但し、1990年代には、イスラム原理主義の理論はむしろ硬直していた。例えば、1992年のWTC爆破事件の理論的指導者として逮捕されたエジプト人ウマル・アブドッラフマーン(ʿUmar ʿAbd al-Raḥmān)は実際に遠い敵への攻撃を主導したにもかかわらず、理論面では「近い敵との戦いが優先される」との立場を堅持していた。またアイマン・ザワーヒリーは1995～96年に、「イスラム教徒はまず、“近くの敵”である、国内の敵(＝自国の政権)と戦うべき。それを打倒した後に、“遠くの敵”である、国外の敵(＝米国やイスラエル)と戦うべき。近くの敵に対する戦いがまず優先される。なぜなら、コーラン第9章123節には“信仰する者よ、あなた方に近い不信仰者と戦え”と記されている」と述べている³⁶。このように、1990年代半ばには、理論と実践の乖離と言うべき現象が起きていた。この状況は、1998年に解消される。

1998年、ビン・ラーディン率いるアルカーイダとザワーヒリー率いるジハード団は合併した³⁷。彼らは「ユダヤ・十字軍と戦う世界イスラム・ジハード戦線」(al-Jabha al-Islāmiyyah al-ʿālamīyah li-Jihād al-Yahūd wa-l-ṣalābiyyīn)の結成を宣言し、さらに、米国人殺害を

³⁵ 例えば飯塚正人「ムスリム同胞団と新世代エリート」小杉泰編『イスラームに何が起きているか』(平凡社、1996年)104ページを参照。

³⁶ al-Zayyat, *The Road to al-Qaeda*, pp.62-64.

³⁷ 合併後の組織名はアルカーイダなので、形式的には、ザワーヒリー率いるジハード団が吸収された形となる。

命じるファトワー (fatwā) ³⁸を發布した³⁹。有力なイスラム原理主義組織がこのようなファトワーを發布したことによって、遠い敵との戦いが優先されることが、理論面でも明確に打ち出された。そして同年、アルカーイダはケニアとタンザニアで米国大使館爆破事件 (=「遠い敵」への攻撃) を起こし、自分達の理論と実践が一致していることを見せ付けた。こうして 1998 年以降今日まで、遠い敵との戦いが理論と実践の両面で遂行されていく⁴⁰。2001 年の 9・11 も、この流れの出来事である。

3 9・11 以降のアルカーイダ⁴¹

(1) ヘッドクォーターと地域支部

アルカーイダは 9・11 を計画中の時点から、既にヘッドクォーターと別働隊 (=9・11 の実行部隊) は分かれて行動していた。ビン・ラーディンやザワヒリーら最高幹部から構成されるヘッドクォーターはアフガニスタンもしくはパキスタンに潜伏していると見られるが、それに対し、ムハンマド・アターら 9・11 の実行者はドイツなどで活動していた⁴²。

9・11 以後も、ヘッドクォーターと別働隊がそれぞれ独自に行動するという分業体制は変わっていない。ヘッドクォーターは、ビデオメッセージや音声メッセージ、あるいはドキュメンタリー映画などを作成・配布する、プロパガンダ活動に最大の重点を置いている。プロパガンダ活動を通じて、イスラム原理主義過激派のシンパ (アルカーイダの別働隊、ないしは地域支部の新規メンバー) を獲得し、勢力を増大することを狙っているものとみ

³⁸ ファトワーとはイスラム法の意見書のこと。大幅に意訳すれば、布告。

³⁹ TMAbd al-Ra^om Al^o, Tan^om al-Q^uṣṣ al-TMIshr^una TMo^oman wa-l-Ghawz mustamirr (Cairo: al-Ma^or^usah, 2007), pp.85-86.及び、1998 年 2 月 23 日付の al-Quds al-TMArab^o紙に掲載された同戦線の声明文を参照。声明文は、ウェブサイトでは以下のアドレスにて閲覧可能。

<<http://www.library.cornell.edu/colldev/mideast/fatw2.htm>>2009 年 12 月 9 日アクセス。

⁴⁰ なおムンタシル・ザイヤートは、1990 年代に攻撃対象が近い敵から遠い敵にシフトした理由の一つとして、中東域内でのイスラム原理主義者による武装闘争 (=近い敵との戦い) が失敗に終わったことを挙げている。彼によると、当局の厳しい締め付けなどのため、イスラム原理主義者は結局、近い敵を打倒することの断念を余儀なくされ、そのため遠い敵との戦いに向かったとされる。Munta^uir al-Zayy^ut, *Ayman al-Raw^uḥir^u kam^u TMariftu-hu* (Cairo: D^ur Mi^ur al-Ma^or^usah, 2002), pp.121-126.

⁴¹ この項目以降については、西野が 2001 年以降にウェブサイトから収集したビデオ映像ファイルなどに多くを依拠する。

⁴² そして、ビン・ラーディン (=ヘッドクォーターの長) とムハンマド・アター (=実行部隊の長) の間の連絡係を引き受けていた人物が、ラムジー・ビナッシーバ (Ramz^o bin al-Shaibah) である。同人は 2002 年にパキスタンでアルジャジーラの極秘インタビューに応じ、自身が両者間の連絡係として 9・11 の調整役を果たしたことを告白した。その後、同人は 2002 年 9 月にパキスタンのカラチで逮捕された。Yosri Fouda and Nick Fielding, *Masterminds of Terror* (New York: Arcade Publishing, 2003), pp.15-21.

られる。

一方、別働隊について言うと、まず、9・11の実行部隊は、ハイジャック機で自爆死したためにほぼ⁴³全滅した。しかしヘッドクォーターのプロパガンダに共鳴した者達が、新たな別働隊（ないしは地域支部のメンバー）となり、その後のテロ活動を担っている。9・11後にもアルカーイダが関与したとされるテロは多数起きているが、その大半は、こうしたプロパガンダに共鳴する人々が引き起こしたものとみられ、ヘッドクォーターは関与していない可能性が高い。なお、9・11は一回きりの自爆テロだったため、それを担った者たちは別働隊と呼ばれるのが適切であろう。一方、9・11以降、特に2004年以降のアルカーイダのテロ活動は多くの場合、「特定の地域を地盤として、一定数のメンバーを擁し、一定期間以上に渡って持続的に活動する。自爆テロ以外の手法を含め、様々なテロを何度も行う」形態を取る⁴⁴。そのため、それを担う者たちは地域支部とそのメンバーと呼ばれるのが適切であろう。

ヘッドクォーターはプロパガンダに重点を置くが、他方、地域支部は個別のテロ活動に重点を置く⁴⁵。地域支部はヘッドクォーターとの支配・従属関係にはなく、基本的には独立した立場で独自に行動している。地域支部は、ヘッドクォーターの唱える理論・理念に共鳴しているからアルカーイダの一員として活動しているに過ぎない。なお地域支部の一部は、既存のイスラム原理主義組織（≠アルカーイダ）が名称変更により衣替えしたものである。

地域支部は、アラビア半島（＝サウジアラビア）、イラク、エジプト、アルジェリアなど中東各地に存在する。アルカーイダは厳密なメンバーシップを持たないネットワーク型の組織であり、理論上は誰でもすぐにアルカーイダの一員になる（一員であると自称する）ことが可能であるが、このことが地域支部の新設を容易にしている。

例えばアルカーイダ・イラク支部は、元々はアルカーイダとは別のイスラム原理主義組織「神の唯一性と聖戦の集団」(Jam[±]TMat al-Taw[∞]d wa al-Jih[±]d)であり、2003年以降のイラクでテロ活動を多数行っていた⁴⁶。しかし2004年、同組織の指導者であるヨルダン人ザルカーウィーはビン・ラーディンに対する忠誠の誓いを行ってアルカーイダの傘下に入り⁴⁷、組織名を「メソポタミアの聖戦カーイダ⁴⁸」(Tan[∞]m Q[±]TMidah al-Jih[±]d f[∞] Bil[±]d

⁴³ 米国に入国できず拘束され、9・11に参加できなかった者もいるため、「ほぼ」という表現を使用。

⁴⁴ イラクでアブー・ムスアブ・ザルカーウィー (Ab[±] Mu[↑]TMab al-Zarq[±]w[∞]) が取った手法は、その典型。

⁴⁵ 但し、地域支部もプロパガンダ活動を行っている。イラク支部やアラビア半島支部、アルジェリア支部は、ヘッドクォーターとは別にウェブサイト上でビデオ映像などの配布を行っている。

⁴⁶ <http://news.bbc.co.uk/2/hi/middle_east/3677658.stm> 2009年3月20日アクセス。

⁴⁷ <http://news.bbc.co.uk/2/hi/middle_east/3752616.stm> 2009年3月20日アクセス。

al-Raḥīdayn) (=アルカーイダ・イラク支部) に改称した。このように、イラク支部は既存の組織の名称変更によって誕生した。同様にアルジェリア支部も、元々は「宣教と戦闘のためのサラフィー主義集団」(al-Jamā'ah al-Salafīyah li-l-Da'wah wa-l-Qitāl⁴⁹) という名称のイスラム原理主義組織だったが、2007 年 1 月に「イスラム・マグリブ⁵⁰のアルカーイダ」(Tanẓīm al-Qaḍīdah fī al-Maghrib al-Islāmī) (=アルカーイダ・アルジェリア支部) に改称し、同時にその指導者も、イラク支部の指導者ザルカーウィーにちなんで名前をアブー・ムスアブ・アブドゥルワドゥード (Abū Muḥammad Abd al-Wadūd) に改名⁵¹した⁵²。

このように、各地のイスラム原理主義組織が半ば勝手にアルカーイダの地域支部を名乗る⁵³ことで、アルカーイダの地域支部網 (ネットワーク) は拡大している。この傾向はイラク支部が誕生した 2004 年以降、特に顕著である。こうした地域支部の相次ぐ誕生は、ヘッドクォーターが事前に認可したものであったのかは不明である。但し、ヘッドクォーターはビデオメッセージや音声メッセージの形で自らの意思を表明可能であり、こういったメッセージに地域支部の誕生を歓迎する文言は見られる一方、地域支部の勝手な行為を批判する文言は見られないため、「地域支部が誕生し、それらの支部が個別のテロを行っている」という現実をヘッドクォーターは容認しているものと見られる。

(2) ヘッドクォーターの個別のテロへの関与

既に述べたように、9・11 以降にアルカーイダが起こしたとされるテロの大半は、地域支部の単独行動によるものであり、ヘッドクォーターは関与していない可能性が高い。例えばイラク支部は設立して間もない時期に日本人香田証生氏の誘拐殺害事件を起こしたが、これにビン・ラーディンらヘッドクォーターが関与した可能性はほぼゼロである。

しかし、2005 年 7 月 7 日のロンドン同時爆破事件、2006 年 8 月 10 日のロンドン発旅客機同時爆破未遂事件⁵⁴の 2 大テロ (未遂含む) については、ヘッドクォーターが関与した可能性が高い。その証拠として、2005 年のロンドン同時爆破事件については、事件後、ア

⁴⁸ アルカーイダの「アル」はアラビア語の定冠詞であり、前後に来る単語など文法上の理由により、欠落することがある。

⁴⁹ 欧米語圏では Groupe Salafiste pour la Prédication et le Combat (略称 GSPC) の名で知られていた。

⁵⁰ マグリブは語義的には西部を意味し、通常、モロッコ、アルジェリア、チュニジア、リビアにまたがる広大な領域を指すが、同組織の主な活動領域はアルジェリアであるので、同組織をアルジェリア支部と呼んで差し支えないと思われる。

⁵¹ アブー・ムスアブ・ザルカーウィーのアブー・ムスアブを取り入れた。

⁵² <<http://news.bbc.co.uk/2/hi/africa/6356781.stm>> 2009 年 3 月 20 日アクセス。

⁵³ なお、アルカーイダ・アルジェリア支部は、「組織名の変更はビン・ラーディン自身の指示によるもの」と主張している。

<<http://www.meij.or.jp/members/kawaraban/20070131algeria-hp.PDF>>2009 年 12 月 9 日アクセス。

⁵⁴ この事件を契機に、航空機への液体持ち込みが制限されるようになった。

ルカーイダ・ヘッドクォーターの広報部門サハブ(al-Saḥb)⁵⁵が自爆死したパキスタン人実行犯の出演する遺言ビデオを発表したこと、さらにそのビデオには、実行犯に加えてヘッドクォーターNo.2のアイマン・ザワーヒリーも出演していたことが挙げられる。サハブはヘッドクォーターの広報部門であり、各地域支部はそれとは別の広報部門を持つ。そして各地域支部が単独で行ったテロについては、基本的にサハブは報じない(犯行声明を発表しない)。それ故、ロンドン同時爆破事件にはヘッドクォーターが関与したと見るのが妥当である。

次に、2006年8月10日のロンドン発旅客機同時爆破未遂事件については、同時爆破計画が露見する少し前、サハブの作成した事件の予告めいたビデオメッセージが、これを入手したアルジャジーラによって放映されていた。このビデオメッセージは、No.2であるアイマン・ザワーヒリーの演説が収録されているものだが、画面構成が彼の普段のビデオメッセージとは異なる。ザワーヒリーのビデオメッセージは多くの場合、背景には何もない(＝おそらく大きな布の前で撮影している)か、あるいはアラビア語の書籍が多数収められた書齋にて撮影されている。しかしこの時のビデオメッセージでは、ザワーヒリーの周囲には①9・11実行犯の写真、②大砲のミニチュアという2つの小道具が置かれていた。これは珍しいことであり、この映像を放映した際にアルジャジーラのコメンテーターは、「これらの小道具は、アルカーイダが9・11のような事件を再び計画していることを意味しているのでは」と述べている。また、このビデオメッセージの中で、ザワーヒリーは「今日、以下のことを宣言しなければならない。私達はあらゆる場所にて、ユダヤと米国の権益を攻撃の標的とする。それどころか、チェチェン、カシミール、アフガニスタン、イラク、パレスチナ、レバノンでイスラム教徒に対する侵略に加担する全ての国の権益を、私達は攻撃の標的としなければならない。イスラム法に照らして、イスラム教徒に戦争を仕掛けている(とみなされる)全ての国の政府と国民が(攻撃の標的である)⁵⁶」と発言しており、これは、ロンドン発旅客機の連続爆破計画を指すものと見られる。それ故、このビデオメッセージは、アルカーイダのヘッドクォーターによる犯行予告ビデオだった可能性が高い⁵⁷。そしてこれが予告ビデオであるのであれば、ヘッドクォーターは当然この計画を知っていたことになり、つまり、この計画にはヘッドクォーターが関与していたと見る

⁵⁵ サハブは雲の意味。

⁵⁶ 2006年7月28日のアルジャジーラがこのメッセージを放映。この箇所の録画ビデオは西野が所持。

⁵⁷ ビン・ラーディンは1998年のケニア、タンザニア米大使館同時爆破事件の前に、アフリカ地図を背景にインタビューに応じており、同時爆破事件後、「(私はアフリカ地図を背景にすることで、)攻撃を予告した」との旨を述べた。それ故、アルカーイダのテロ予告は、以前にも例がある。なお彼らのテロ予告は1998年の場合も2006年の場合も、具体的な場所や日時などを全く示しておらず、治安当局者がテロ対策を取る上では、ほとんど役に立たない。

のが妥当である。

以上2つの具体例から明らかなように、ヘッドクォーターは個別のテロの大半には関与していないとみられるが、一部の大規模テロには関与している可能性が高い。

(3) アルカーイダ（のヘッドクォーター）のプロパガンダ戦略

9・11 後、アルカーイダのヘッドクォーターは潜伏を続けており、人前に姿を出さない。この状況下で、彼らはイデオロギーの拡散と勢力拡大のため、プロパガンダ活動に最大の重点を置いており、音声メッセージ、ビデオメッセージ、ドキュメンタリー映画などの作成・公開を行っている。

9・11 後、2003～04 年頃までは、彼ら⁵⁸は、①音声メッセージやビデオメッセージを作成する、②それをカタールの衛星テレビ局アルジャジーラに送付する、③アルジャジーラがそれを放映する、というプロパガンダ戦略を取っていた。つまりこの時期、メッセージを直接人々に伝えるのはアルカーイダではなく、テレビ局だった。

しかし 2003～04 年頃から、アルカーイダは徐々に、①音声メッセージやビデオメッセージを作成する、②それをウェブサイト上にてファイル形式で人々に配布する、という手法を採用するようになった。それまでは、情報伝達ルートはアルカーイダ→テレビ局→視聴者、であり、アルカーイダは人々に直接情報発信を行ってはいなかったが、これによって情報伝達ルートはアルカーイダ→視聴者となり、アルカーイダは第三者を介することなく、人々に直接情報発信を行うようになった。

この新手法が可能になった理由は、ADSL などブロードバンドの普及である。ブロードバンドの普及により、映像ファイルのような数百 MB の巨大ファイルも容易に送信・配布することが可能になった。そのため、アルカーイダは、アルジャジーラにメッセージを送付して放映してもらわなくても、自分たちでメッセージを直接配布できるようになったのである⁵⁹。なお、巨大ファイルの配布が容易になったことの副産物として、この時期以降、

⁵⁸ より正確には、ヘッドクォーターの広報部門であるサハーブ。

⁵⁹ 但し、アルカーイダにとってアルジャジーラが重要性を失ったわけではない。この時期以降、アルカーイダは①音声メッセージやビデオメッセージを作成する→②それをアルジャジーラに送付する→③アルジャジーラがそれ（の一部）を放映する→④視聴者はそれ（の全体）を見たいと思い、ウェブサイト上でファイル探しを始める→⑤そのタイミングにあわせて、アルカーイダがウェブサイト上で、該当ファイルの配布を開始する、という手法をも取るようになった。この手法は、配布するメッセージ等が重要なものであり、かつ、大規模（＝長時間）なものである場合に用いられることが多い。例えば、2006 年 9 月にアルカーイダが 9・11 の 5 周年記念ドキュメンタリー映画を作成・公開した際には、この手法が採用された。

この手法においては、「アルジャジーラによるメッセージの一部の放映」は、例えば、映画の CM をテレビで流すこと、と全く同じ役割を果たしている。メッセージの一部のみをテレビ局にまず放映させることによって、視聴者に関心を抱かせ、その上で、メッセージ全体（を収録したファイル）

音声メッセージやビデオメッセージの長さが長くなる傾向が見られる⁶⁰。

こうして、アルカーイダは2003～04年頃に、メッセージの作成から配布までの全てを自力で行う能力を身に着けた。そしてその後、彼らは映像作品の作成能力を発展させていく。その結果、彼らは従来の単純なビデオメッセージに加えて、ビデオ番組、ないしはドキュメンタリー映画と言うべき高度な映像作品を作成できるようになった。2006年9月にアルカーイダは9・11の5周年記念映画を公開したが、これは、このような経緯を経てのことである。

(4) プロパガンダの具体例——「マンハッタン攻撃——知識は行動のためにある」

アルカーイダは9・11を極めて重要な出来事と位置付けており、2002年以降、9月11日前後に重要なビデオメッセージなどを発表することが多い⁶¹。その一環として、2006年9月11日前後に、彼らは9・11の5周年記念ドキュメンタリー映画「マンハッタン攻撃——知識は行動のためにある」を公開した。本作品はアルカーイダ（のヘッドクォーター）が作成したおそらく初の映画である。本作品の公開は、アルカーイダ（のヘッドクォーター）の映像作成能力が、単純なビデオメッセージの作成から、高度な映像作品の作成へと進化したことを証明した。それに加えて、本作品は、①9・11に関する新証拠を自ら暴露した、②アルカーイダの歴史観、世界観を提示した、の2点で重要な意味を持つ⁶²。

をウェブサイトにて配布するのである。

なおアルカーイダのビデオメッセージは、長いものだと2時間以上に及ぶ。このようにメッセージが長時間のものである場合、テレビ局がその一部始終を放映することは、時間的制約からも困難である。

⁶⁰ メッセージの時間が長くなると、配布するファイルのサイズは大きくなるが、ブロードバンドの普及後においては、それはほとんど問題にはならない。また、テレビ局がメッセージを放映するのではないため、アルカーイダが（番組の放映時間などの）時間的制約を気にする必要もなくなった。

⁶¹ 例えば2002年には、山岳部をピン・ラーディンとザワーヒリーが杖をついて徒歩で歩いているビデオ映像がアルジャジーラに送付された。2005年には、アイマン・ザワーヒリーのビデオメッセージがウェブサイト上で公開された。但し、毎年確実に9月11日前後に重要メッセージが発表されとは限らないものと見られる。

なおこの「9月11日前後に重要メッセージを公開する」という事実から明白なように、アルカーイダは、西暦（太陽暦で1年は365日）とイスラム暦（ヒジュラ暦。太陰暦で1年は354日）では、西暦の方を重視する傾向が見られる。西暦2001年9月11日はヒジュラ暦1422年6月22日だが、アルカーイダはヒジュラ暦6月22日に合わせて重要メッセージを公開することはない。西暦とヒジュラ暦の換算については、<http://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Region/Mid_e/koyomi.html>（2009年3月15日アクセス）を参照。

⁶² また本作品は、米国のハリウッド映画に対する対抗プロパガンダの側面をも有する。2006年には、9・11でハイジャックされた航空機の乗客や現場で救助活動に従事した警察官らを英雄の人物として描いたハリウッド映画である、『ユナイテッド93』や『ワールド・トレード・センター』が相次いで公開され、世界各国で上映されていた。これに対して、アルカーイダが「9・11における英雄は（乗客や警官などではなく、）ハイジャックとワールド・トレード・センターへの突入を敢行したアルカーイダのメンバー達である」との立場から作成し、ウェブ上から全世界に向けて配布・公開し

まず①について述べると、9・11 後しばらくの間、ビン・ラーディンは9・11 を賞賛する一方、自らの関与については肯定も否定もしなかった。その後、2002 年にアルカーイダの（ヘッドクォーターの）幹部であるハーリド・シャイフ・ムハンマド（Khaldid Shaikh Muammad）と、アルカーイダの（ヘッドクォーターの）メンバーであるラムジー・ビナッシーバがアルジャジーラの極秘インタビューに応じ、9・11 がアルカーイダの仕業であることを認めた⁶³。しかしこの時点でも、「アルカーイダ（の少なくとも一部メンバー）が9・11 に関与した」ことが明らかになっただけであり、ビン・ラーディンの関与については不明なままだった。そして2004 年によく、ビン・ラーディンは、自身が9・11 に直接関与しており、9・11 実行部隊の総司令官ムハンマド・アターと連絡を取り合っていたことを自ら暴露した⁶⁴。但しこの時のビン・ラーディンの言葉以外には、ビン・ラーディンの9・11 への関与を示す物的証拠はないままだった。

ところが、2006 年のこの映画にて、ビン・ラーディンとラムジー・ビナッシーバが9・11 以前に山岳地帯で会談している映像が初公開された⁶⁵。ラムジー・ビナッシーバは、自身がヘッドクォーターと9・11 実行部隊の間の連絡係を務めていたことを2002 年の極秘インタビューの際に既に明かしていた。つまり初公開されたこの映像は、ビン・ラーディンとビナッシーバが実際に会っていたこと、すなわち、ヘッドクォーターのビン・ラーディン→連絡係のラムジー・ビナッシーバ→9・11 実行部隊、というルートでビン・ラーディン自身が9・11 に関与していたこと、を証明する物的証拠である。

②の歴史観、世界観について述べると、アルカーイダの認識によれば、

1924 年のカリフ制廃止、1948 年のイスラエル建国、1990 年のサウジアラビアへの米軍駐留を経て、地球上からイスラム共同体（イスラム国家、イスラム社会）は消滅した状態にあった。そのような状況下、1990 年代にアフガニスタンではターリバーンの最高指導者ムハンマド・オマル師（Muammad Umar）がイスラム首長国⁶⁶を建国

たのが、本作品である。

⁶³ アルジャジーラは2002 年9 月、9・11 事件1 周年記念番組“Sirr al-Ghuyab al-araq ila 9/11”にてこのインタビューを放映。同番組のビデオは西野が所持。

⁶⁴ 菊地達也、西野正巳「2004 年10 月ビン・ラーディン声明とその意義」449～461 ページを参照。本人が9・11 への関与を明言したこの時以降、日本のマスコミはそれまでのビンラディン氏という表記をビンラディン容疑者という表記に変更した。

⁶⁵ なお、会談映像から撮影時期を特定することは困難なので、理論上は、撮影時期が2001 年9 月11 日以降、（ビナッシーバが逮捕される）2002 年9 月までのどこかの時点である可能性もある。但し、仮にそうだとしても、両者に面識があったことを示す証拠としての、この映像の重要性に変化はない。

⁶⁶ イスラム首長国は原語ではTMimarah islamiyah。つまり同国の長の称号はアミール（＝首長）（amir）であり、カリフ（khalifah）ではない。

し、約70年ぶりにイスラム国家を復活させた。すると、シオニストや十字軍は同国を脅威とみなして攻撃のターゲットとした。そのため、米国やイスラエルに対抗すべく、1998年にアフガニスタンで、ビン・ラーディンやザワヒリーらによって「ユダヤ・十字軍と戦う世界イスラム・ジハード戦線」が結成された。さらに同年、イスラム教徒はナイロビとダルエスサラームの米大使館爆破に成功した。両大使館は、米国とイスラエルの諜報機関のアフリカ最大の拠点だった。その後、米国でブッシュ政権が発足したが、同政権は、イスラム首長国⁶⁷がカスピ海からのパイプライン延長計画の妨げとなっていることや、同国が麻薬栽培を根絶したことに對して不満を持っていた。ブッシュ政権はイスラム首長国に恫喝や脅迫を行ったが、同国は屈しなかった。2001年、ブッシュ政権はイスラム首長国への軍事攻撃を計画した。これに對し、同国は塹壕を掘るなどして防戦に備える一方、米軍が攻めてくる前に米国に一撃を与えるべく、マンハッタン攻撃⁶⁸を敢行した。つまり、2001年末以降の米軍によるアフガニスタンへの攻撃は、9月11日にアルカーイダがマンハッタン攻撃を行ったことに起因するのではなく、それ以前からブッシュ政権が計画していた。

それまでもビデオメッセージなどを通じて断片的には明らかにされていたアルカーイダの歴史観、世界観は、この映画において、従来よりもはるかにまとまった形で提示されている。さらにこの映画は、アルカーイダが2001年の9・11実施前の時点で、9・11後の活動について長期計画を有していたことを証明している。仮に長期計画を有していなかったならば、9・11から5年間も（重要映像の暴露などの）“ネタばらし”を小出しに続けることができたとは考え難い。

こうしたプロパガンダ活動は、言論の自由の観点からは取り締まりが困難である。しかし、このプロパガンダ活動こそが、9・11後のアルカーイダが勢力の維持・拡大に成功している最大のツールであると言える。

4 おわりに――アルカーイダの弱体化に向けた処方箋は存在するか？

2001年の9・11後、米国をはじめとする国際社会はテロとの闘いを続けている。しかしアルカーイダは9・11以降も、ロンドン同時爆破事件をはじめとした大規模テロを実施しており、また、イラクやアルジェリアに新たに支部を発足させるなど、勢力圏はむしろ拡

⁶⁷ ターリバーン政権のこと。

⁶⁸ 9・11のこと。

大している。アルカーイダが勢力を維持・拡大できている理由の一つは、彼らのイデオロギーに共鳴する人々が必ずしも少数派とは言えないことにある。アルカーイダは、思想的には(サウジ的な排外主義を除けば)オーソドックスなイスラム原理主義を信奉している。そして現在の中東諸国、特にアラブ諸国では、一般市民の間でイスラム原理主義の人気は高い。例えば、2006年1月に実施されたパレスチナ自治区の評議会選挙でイスラム原理主義組織のハマース(Ḥamās)が過半数の議席を獲得して圧勝した。また、2005年11～12月に実施されたエジプト国会選挙では、政府による不当な介入が指摘されたにもかかわらず、世界最大のイスラム原理主義組織であるムスリム同胞団が事実上の野党第一党に躍進した。このように、イスラム原理主義それ自体の人気の高い状態では、アルカーイダが人々の支持を得ることや新規メンバーを獲得することは、困難ではない。

イラク駐留米軍は2006年、アルカーイダ・イラク支部の指導者であるヨルダン人ザルカーウィーを殺害した⁶⁹。これは当時の米軍にとって大きな成果であり、ブッシュ米大統領もこの成果をアピールした。しかしイラク支部は、その後程なくして、後継指導者の選出を発表した⁷⁰。さらにその後、イラク支部は独立国家「イラク・イスラーム国」の建国を宣言し、閣僚名簿まで発表した。また、同支部によるテロは沈静化の兆しを見せず、ウェブサイト上で配布される同支部作成のビデオには、(国際社会によって承認された)イラク国の軍人や警察官が、“偽りの国家の偽軍人、偽警察官”として、“正統な”国家たるイラク・イスラーム国の“治安当局者”によって処刑される映像が多数収録されていた。つまり、この時期の米軍はイラク支部の指導者殺害には成功したものの、同支部の弱体化には失敗した。逆に言えば、特定の有力メンバー(＝ザルカーウィー)の殺害は、アルカーイダの弱体化にはつながらないことが実証された。さらに米国及び国際社会を困惑させたことに、ブッシュ大統領がザルカーウィー殺害の成果を発表した頃、ザルカーウィーの母国ヨルダンでは、複数の国会議員が“殉教者”ザルカーウィーの遺族の下へ弔問に訪れていた⁷¹。ザルカーウィーは、自ら米国人の首を切り落とし、また、部下に命じて日本人香田証生氏の首を切り落とさせた⁷²人物であり、国際社会にとっては犯罪者に他ならない⁷³。だが彼は、少なくともヨルダンなど中東・イスラム諸国の一部の人々にとっては英雄なのだ⁷⁴。

⁶⁹ <http://news.bbc.co.uk/2/hi/middle_east/5072104.stm> 2009年3月20日アクセス。

⁷⁰ <http://news.bbc.co.uk/2/hi/middle_east/5084336.stm> 2009年3月20日アクセス。

⁷¹ <http://news.bbc.co.uk/2/hi/middle_east/5073170.stm> 2009年3月20日アクセス。

⁷² 米国人斬首、香田氏斬首共に、西野がそのビデオ映像を視聴。なお米国人斬首の際には、ザルカーウィーとされる殺害実行者は覆面をしていたため、殺害実行者が本当にザルカーウィーであるかは確言できない。

⁷³ ザルカーウィーが関与したとされる主要な事件については、<http://news.bbc.co.uk/2/hi/middle_east/5058262.stm> (2009年3月20日アクセス)を参照。

⁷⁴ 例えば、イラクでザルカーウィーのテロが激しかった時期、イラクの一部の子供たちの間では、(日

このように所謂“国際社会”の価値観と、中東・イスラム諸国の価値観に齟齬が生じている状況下で、アルカーイダの弱体化に向けてどのような処方箋が存在するのだろうか。

処方箋として第一に挙げられるのは、中東・イスラム諸国の大衆がイスラム原理主義に対して無関心になることだ。日本で最もアルカーイダに詳しい人物と目される石野肇は、9・11直後の著作で既にこの趣旨の指摘を行っている⁷⁵。但し、ビン・ラーディンはそれに気付いており、だからこそ、彼は関心を引くようなメッセージを発し続ける、ということも石野は指摘している。大衆がイスラム原理主義に対して無関心になれば、イスラム原理主義を信奉するアルカーイダも影響力を失い、無害化されるのは、理屈的にはおそらく正しい。しかしアルカーイダが注目を浴びている現状では、これは非現実的な案であり、有効な処方箋とはなり難い。

第二に挙げられる処方箋は、「イスラム原理主義はまだ致命的な敗北体験をしたことがなく、だからこそ、大衆はイスラム原理主義に幻滅していない。一度イスラム原理主義が致命的な敗北体験をすれば、大衆はこれに幻滅し、結果、イスラム原理主義も弱体化する」というものだ。周知のように、中東・イスラム諸国、特にアラブ諸国では、1960年代までは世俗的な民族主義が隆盛を誇っていた。しかし1967年の第3次中東戦争でアラブ諸国の民族主義政権がイスラエルに惨敗したため、大衆が民族主義に幻滅し、民族主義は弱体化した。その後、大衆が民族主義に代わる“まだ敗北経験のない”イデオロギーとして選んだものが、イスラム原理主義である。イスラム原理主義は1970年代以降急速に影響力を拡大するが、1980年代にアフガニスタンでソ連に勝利したことにより威信を増し、1990年代以降、その勢力を一層強めた。アルカーイダは、イスラム原理主義に敗北経験がないことがその人気の秘訣であることを、明確に意識している。そのため、ビン・ラーディンらのビデオメッセージでも、イスラム原理主義者が1980年代にアフガニスタンでソ連に勝利したことや、1990年代にソマリアで米国に勝利したことなどが、繰り返し言及されている。では、まだ敗北経験のないイスラム原理主義に、敗北を経験させるには、どうすればよいか。一番容易なことは、イスラム原理主義者に国家を運営させ、そして運営に失敗させることである。イスラム原理主義者は現実的な国家運営プランを持っていないため、仮に彼らが政権を奪取・運営した場合、国際社会がそのイスラム原理主義政権に対して制裁などを何も行わなかったとしても⁷⁶、同政権は行き詰まり、崩壊するか、大幅な路線転換を余

本で言うところの仮面ライダーごっこなどと同様の意味で)“ザルカーウィーごっこ”が流行していた。

⁷⁵ 石野『ウサーマ・ビン・ラーディン』242～247ページ。

⁷⁶ 逆に、制裁などの介入を行った場合、イスラム原理主義政権が「政権運営が上手くいかないのは、外国の介入のせいだ。介入がなければ、上手くいっていた」と主張することが可能になる。イランはこのケースに該当する。

儀なくされる可能性が高い。そしてその場合、大衆が「イスラム原理主義は敗北した」と感じ、イスラム原理主義に幻滅する可能性も十分にある。しかし、国際社会はイスラム原理主義政権を放置せず、これに介入することが多い。例えば、1992年のアルジェリアで民主的な選挙によってイスラム原理主義政権が発足しそうになった際、同国の軍部が介入して選挙結果を無効にしたが、国際社会はこれを黙認した。また、1990年代後半にアフガニスタンでターリバーンが国土の大半を実効支配した際、国際社会はターリバーン政権を承認しなかった。また、2006年にソマリアでイスラム原理主義組織「イスラム法廷連合」が国土の大半を支配下に置いた際、エチオピア軍による介入を国際社会は黙認した。このように、国際社会はイスラム原理主義政権の発足を未然に防ぐ傾向が強く、そのため、イスラム原理主義政権が自らのミスによって政権運営に行き詰る事態は生じ難い。この結果、イスラム原理主義政権は致命的な敗北体験を負わずに済んでおり、そのため、大衆の人氣も衰えない。さらに1990年代以降、アルカーイダのような、明確な領土を持たないテロ組織が台頭したため、イスラム原理主義に敗北体験を被らせることは、一層困難になった。それ故、この処方箋も実現性に乏しい。

第三に挙げられる処方箋は、中東・イスラム諸国の教育カリキュラムを修正することによって、イスラム原理主義に共感しない新世代を育成し、それを通じてイスラム原理主義（及びアルカーイダ）の弱体化を図ることだ。これは、20～30年の長い時間を必要とするが、理論上は可能である。9・11の実行犯19名の大半はサウジ人だったが、米国は9・11後、サウジにイスラム原理主義的な教育カリキュラムの変更を要求した。しかしサウジはこれを内政干渉とみなして反発し、結局、カリキュラムは変更されなかった。この事例からも明らかなように、中東・イスラム諸国にカリキュラム変更を強制することは難しい。また、仮にこれらの国がカリキュラム変更に応じたとしても、新しい教育を提供する教員集団をどう育成するのか、という問題も残る。つまり現実的には、この処方箋も困難である。

以上、仮に実現できれば、アルカーイダ及びイスラム原理主義の勢力は全世界で弱体化するという効用が見込まれる反面、現状では実現性に乏しい処方箋を3つ挙げた。以下では、普遍性には欠けるが、特定地域においてアルカーイダの弱体化に（一時的に）成功した事例を挙げる。イラク西部のアンバール県 (muḥafazah al-Anbar) では2007年後半以降、米軍が懐柔工作によって、イスラム教スンニ派の地元部族勢力と、外国人主体のアルカーイダ系武装勢力の間を離反させることに概ね成功した。地元部族勢力とアルカーイダ系武装勢力は、米軍による占領を嫌う点では意見が一致したが、地元部族勢力が早期の占領終結と戦後復興を望むのに対して、アルカーイダ系武装勢力は「テロ行為の継続のため

にはイラクが引き続き不安定な状態にあることが望ましい」と考えており、この点で両者の意見は食い違っていた。イラクの治安悪化の長期化に伴い、地元部族勢力には厭戦気分が広がっていたとされ、この点に着目した米軍は、地元部族勢力に対して資金や銃器などを提供することによって、彼らとアルカーイダ系武装勢力を離反させた。その結果、2007 年後半から 2008 年末にかけて、同県やその周辺地域ではアルカーイダ系武装勢力によると見られるテロ件数は減少した。しかしこの手法は、例えばアフガニスタンに適用可能かは疑わしく⁷⁷、また、世界規模でのアルカーイダの弱体化にどの程度貢献するかも未知数である。そもそもイラク西部は元々はアルカーイダ系武装勢力の勢力圏ではなかった地域であり、2003 年以降にこの地域にアルカーイダが浸透したこと自体、米国の占領統治の不善に起因する。この成功は一局面での戦術的勝利とは言えても、戦略的勝利に繋がるものではないだろう。

イラク支部以外のアルカーイダが勢力を減退させたという情報は今のところ存在していない。アルカーイダのヘッドクォーターは 2009 年現在も、これまで同様にウェブ上で活発なプロパガンダを続けている。

（にしのまさみ 企画室共同研究調整官代理兼研究部第 5 研究室）

⁷⁷ アフガニスタンでは民兵の武装解除が重要な課題となっている。イラク西部で米軍が行ったような銃器の提供は、アフガニスタンでは事態の一層の悪化に繋がり得る。また、イラク西部で米軍が銃器を部族勢力に提供したことは、長期的には、彼らが民兵化して、その武装解除が課題となる可能性もある。